























平成 30 年 5 月 5 日

みなさまへ

利屋町町内会会長 古園府 信二

平成 30 年度利屋町祭礼について

祭礼は、下記にて行いますので参加・ご協力をお願いします。

また、「旗立て」は 5 月 12 日(土)午前 8 時半より行います。

1. 場 所 龍雲寺

2. 日時他 5 月 18 日(金) 午後 5 時 宮造り

5 月 19 日(土) 午後 5 時 神迎え

7 時 宵祭り

5 月 20 日(日) 午後 2 時 子供神輿

3 時 子供祭り

4 時 大般若

4 時半 町内の祭典

5 月 21 日(月) 午後 5 時 宮解体

神送り

多くの方の参加を期待したいですね。なお、宮造り、解体に出られない方は、不参加料をお願いします。

源平盛衰記 下巻三十五 巴関東下向之事

高山は九郎義経と院の御所に後ひけるが木曾漏れずしめん
とて三条河原の西端まで打出てたり。木曾は三条河原を東へ
向けて引きけるを重忠は東へ向ひて落ち給ふは大将と見るは
偏事か武威園の住人高山庄司次郎重忠なり返し合せ給やと
言ひければ木曾引を返し河を隔て、射合いたり。
こすが敵は火勢なり木曾は僅に十三騎高山軍が放つ矢は雨の
如く飛びければわづかの小勢堪へか布て三条河原へ引き遅く

其の中に木曾方より前黄緘の鎧に射残したる征矢負うて、
滋藤の弓の真中取り兼毛馬の太きたくましきに鞍置きて乗り
たる武者一陣に逐みて戦ひけるが射るも切るも強く馳せ合せ
戦ひけるにさしも名高き高山軍河原へ引いて出づ。合いたれど
高山半沢六郎を招きて如河に成清我等度々の戦には合いたれど
も是程の軍立てのけはしきにあらず木曾の内には今井樋口
相根井此等こそ四天王と聞ひければ成清あれは木曾の御乳に中三権
何なる者やらんと問ひければ成清あれは木曾の御乳に中三権
椎頭が娘と云ふ女なり強弓の予だれ荒馬乗りの上手衆母子
ながら去にして軍にては一方の大將軍して更に不覚の名も取
らず。今井樋口と兄弟にて怖しき者に候と申す。

木曾は此被を打破つて東を指して落ち行きたり。

四宮河原にて見給へば僅に七騎に残りたり。巴は七騎の内あり
生年二十八身の盛りなる女なり。この剛の者なりければ北國度々
の合戦にも手を負はず百騎の中にも七騎にも成るまで付きたり
けり。
四宮河原神無社関清水関明神打逆とて関寺の前を粟津を向け
てぞ進みける。巴は都を出でける時は智村紅に千鳥の鎧重
を著たりけるが関寺合戦には紫隔子を織り付けたる直雲に前
開着くして前黄緘の腹巻に袖付けて五枚背の鎧をしめ三尺五
寸の太刀に二十四指の真鍮の矢の射残したるを負ひ重
弓にせき弦をかき進みたる真鍮の矢の射残したるを負ひ重
りける。七騎が先陣に進みて打ちけるが河とか思ひけん。背を脱
ご長に餘る黒髪を後へこと打ち越して頭にか思ひけん。背を脱
の髪をよこして眉目も形も優なりけり。歳は二十八と云ふ。

中略

栗津の戦終りて後鎧脱ぎ捨て小袖装束して信濃へ下り。女彦公
達にかくと語り互に袖をせりける。大将殿も女彦公と見ると
より召これければ巴即ち鎧倉へ参る。大将殿も女彦公と見ると
の者も尋常なり心の剛も無双なり。あの子を能く思ひ

其の中に木曾方より前黄織の鎧に射残したる征夫負うて、
滋藤の弓の真中取り糞毛馬の太きたくましきに鞍置きて水り
たる武者一陣に追ひて戦ひけるが射るも切るも強く肥て合せ
戦ひけるにこしも高き山軍河系へ引いて出づに合いたれど
島山半沢六郎を招きて如河に成清我弟度々の戦には今井樋口
も是程の軍立てのけはしきにあらず木曾の内に今井樋口
樋根井此等こそ四天王と聞こえしに是は披等にてもなしさて
何なる者やらんと問ひければ成清おれは木曾の御乳に中三権
権頭が娘と吉ふ女なり強弓の手に荒馬來りの上手乳母子
ながら妻にして軍にては一方の大將軍して更に不覚の名も取
らす。今井樋口と兄弟にて怖しき者に候と申す。

木曾は此彼を打破つて來を指して落ち行きたり。
四宮河原にて見給へば僅に七騎に残りたり。巴は七騎の内にある
生年二十八身の盛りなる女なりこる剛の者なりければ此國度々
の合戦にも手を負はず百騎の中にも七騎にも成るまで付きたり
けり。
四宮河原神無社関清水関明神打逆ぞて関寺の前を栗津を向け
てぞ進みける。巴は都を出でける時は紺村紅に千鳥の鎧直重
を著たりけるが関寺合戦には茶隔子を織り付けたる直室に箭
閉滋くして前黄織の腹巻に袖付けて五枚背の鎧をしめ三尺五
寸の太刀に二十四指の真羽の矢の射残したるを負ひ重
馬にせき弦をかけ遠鉄韋の真羽の矢に金指の鞍置きて重
りける七騎が先陣に追ひて打ちけるが河とか思ひけん背を脱
ご長に餘る黒髪を後へこと打ち越して額に天冠をきて、白打出
の笠もきて眉目も形も優なりけり。哉は二十八と云。

中略

栗津の戦終りて後鎧脱ぎ捨て小袖装束して信濃へ下り女房公
達にかくと語り互に袖をせ替りける世靜つてお大將(源頼朝)
より召これければ巴即ち鎌倉へ参る大將殿も女はれとも無
の者として森五郎へ預けらる。和太太郎義盛は見て事の
景氣も尋常なり心の剛も無双なりあの種を能く七ばやと思ひ
けり。和太義盛申し預らんを二心なく召を守護し年未公とし
奉る。即ち妻と頼みて男子を生む。朝日奈三郎義孝とは是也。
母が力を継ぎたりにけるにや剛も力も無双と聞こえける。石黒
和太合戦の時朝日奈討たれて後巴は泣く泣く越え石黒
は親しければ此にして出家して巴尼どて佛に花を又香を奉り
主親朝日奈が後生を祈ひけるが九十一まで持ちて臨終日度
くして終りにけるとぞ。

南碓市福光に松村奈三郎のこゝにあり

中三権頭

真羽の矢

































































